共通の話題を扱う「酒」に関する日中諺の対照比較考察

王　雪

0. はじめに

諺は言語芸術の一表現形式として、特に節奏性に富む簡潔な言語形式のなかに、思想性豊かな人生哲学が凝縮され、人々の日常行動の指針ともなっている。諺の表現の中には様々な世界が表現されている。諺の世界でも酒は人類の文化・歴史とは切っても切れぬものであったことが窺える。古今東西、酒にまつわる諺や名言名句は数え切れない。先人は酒に対する思考と賛否を諺の中に預けており、様々な考えが構築されている。本稿では、酒に関する諺の世界に焦点を当て、共通する話題を扱う日本と中国の酒に関する諺の対照比較考察をする。

酒の歴史と言えば、中国では既に禹王の時代から、酒が史書に登場する。酒は百楽の長と言われるが、それは漢の時代の「食貨志(米穀・財貨の歴史をしるした巻)」という本から出てきた。日本では縄文時代に既に、酒が造られていたと言われている。米の作り方を伝えた人たちが、同時に米を使うお酒の造り方も伝えたそうである。

酒が作り出され、それを飲むことが増えるにつれて、酒についての諺も生み出されてきたのであろう。酒がどんな役割を果たすかあるいは、その効果はすべて人間次第である。「酒に関する諺には、大きく分けて酒を賛美するものと、酒の害を説くものとの両者がある。物にはすべて長所と短所があり、美点すなわち欠点である場合が多い」と鈴木(1962：110)は述べている。酒に関する日中両国の諺の対照比較をしてみると、表現の面白さ、それに組み込まれている両国の多様な処世術、見方、人生観も窺うことができる。

1.　考察対象と方法

本稿の諺用例は「酒」に関する諺である。日本の諺の用例は『故事・俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編集、1981）を資料に、兎に関する諺を取り出す。『故事・俗信大辞典』は専門事典としてこれまでにみられない規模のものとなっている。一方、中国の諺は、温端政などが編集した『中国谚语大全』（2004）を中心に、諺の用例を取り出した。この辞典は、約十万項目の諺を集録している。中国の現代諺辞書において、諺の数で最も規模の大きい諺辞典である。日本と中国の「酒」に関する諺にそれぞれ J、C とアラビア数字をつけるというように順番をつけることにする。日本の諺は 42 句、中国の諺は 38 句抽出されている。特に、中国の諺用例に対しては、直訳的な日本語訳を付している。

金子（1983：336）は「特殊という面に向ければ、素質・風土・生活・歴史などをそれぞれ異にする各国民の生んだ諺に、それぞれ特殊な国民性が見られることも当然であるし、普遍という面に目を向ければ、共通の人間性が見られることももとより当然である」と述べているように、本稿の考察方法として、金子の研究を踏まえ、まず、「普遍」という面から、両言語の「酒」における類似する諺を対照比較する。そして、「特殊」という面から、両言語の「酒」に関する諺を対照比較し、「酒の飲み方」、「酒の両面性」、「酒と人間性」、「酒と人間関係」、「酒と女色」、「酒と健康養生」という六つの方面に分け、そこに託される日本人と中国人の考え方の類似点と相違点を見出す。また、両国の「酒」に関する認識の共通する部分と相違する部分に細分したものを表にまとめて検討してみる。

2. 酒の飲み方

（日）J1「酒三杯身の薬」J2「人酒を飲む、酒酒を飲む、酒人を飲む」J3「酒は飲むとも飲まるるな」J4「酒は飲むべし飲むべからず」J5「酒は少し飲めば益多く、多く飲めば損多し」（中）C1「一天一口酒，能活九十九」（一日一口のお酒で、九十九まで生きられる）C2「会喝酒，能治病；不会喝，能要命」（酒が飲めるなら、病が治せるが、酒が飲めないなら、命が奪われる）C3「饮酒适量是良药，酒量过度是砒霜」（適当な酒は良薬になる、過量な酒は砒素になる）C4「少饮如蜜，醉饮似毒」（少なく飲むと、蜜のようであるが、酔うほど飲むと毒のようである）C5「勿贪意外财，不饮过量酒」（意外な財貨を貪ってはいけない、酒を飲み過ぎてはいけない）C6「吃酒不吃菜，必定醉得快」（酒だけ飲み、料理を食べないと，早く酔う）

まず、日本の諺の意味を見ると、J1 では、酒も三杯程度の適量ならかえって体の薬になるといっている。J2 では、酒を飲みはじめには、まだ自制心があるが、やがて酔いにまかせて飲み、はては酒に飲まれて乱行に及ぶということを語っている。J3 では、酒を飲むのはさしつかえないが、飲み過ぎて理性を失い、酒に飲まれてしまうような結果になると示唆している。J4 では、酒は飲んでもよいが、程度を超えて飲んではならないと教えてくれる。J5 では、酒を飲むには、各人によってよい程の節があると言っている。

他方、中国の諺の意味を逐語的に日本語に訳したが、諺の内容をもう少し詳しく付け足してみよう。C1 では、養生という方面から、酒の量をいっている。C2 では、飲む人の飲み方によって、即ち、飲む量の多少により、病を治したり、命が奪われたりすることも可能であると述べている。C3、C4 では、酒の適量と過量によってもたらされる効果がまったく正反対になることを示している。C4 では、思いがけなく得た財貨と過量な酒で人間の貪欲に満たしてはいけないと教えてくれる。C5 では、酒を飲む時、料理を食べないと、体に悪い影響が出るといっている。

「酒の飲み方」に関して、両国の諺に両国民衆が同様な考え方を持っていることが窺える。

それは、酒を適切に飲めば、体によい効果が出るが、酒を飲みすぎると、体を壊すことになるということである。

人間が酒をどのように飲むかにより、酒によってもたらされた効果が全然違うことが諺の中に反映されている。日本の諺では、酒三杯が体に良く、酒を飲んでもよいが、度を越してはいけないと強調している。また、少し飲めば、体に益があるが、多く飲めば体に損が出、酒を飲む時の人の様子など、直接酒の飲み方が述べられている。中国の諺では、一日に一口酒を飲むのは養生のよい方法であり、飲み方によって、酒が「病を治す薬」と「命を奪う物」、「良薬」と「砒素」、「蜜」と「毒」になるという両極端の作用があり、人に対する様々な影響が述べられている。また、食事する時は、酒を料理と一緒に取ったほうが人の体に負担がかからないことも語られている。

3. 酒の両面性

（日）J6「酒と朝寝は貧乏の近道」J7「酒は百毒の長」J8「酒は気違い水」J9「酒は諸悪の基」J10「酒は諸道の邪魔」J11「酒に上から剣の舞」J12「酒に十の徳あり」

（以下は中国に出典のある日本語の諺である）

J13「酒極まって乱となる」J14「酒は百薬の長」J15「酒は量りなし、乱に及ばず」J16「酒を嗜む無かれ、狂薬にして佳味に非ず」J17「酒口に入る者は舌出ず」J18「酒は詩を釣る色を釣る」J19「酒は憂いを払う玉箒」J20「酒が尽くれば水を飲む」J21「酒に別腸あり」J22「一杯の酒に国傾く」J23「花は半開酒はほろ酔い」

（中）C7「好酒除百病」（よい酒は百種の病を治す）C8「酒病酒药医」（酒でかかった病気は酒薬で治す）C9「吃了十分酒，方有十分气力」（十分の酒を飲むと、まさに十分の力が湧いてくる）C10「酒坏身子，水坏路」（酒は体を壊すが、水は道を壊す）C11「冷酒伤命」（冷酒は命を損ねる）C12「滚酒伤身，恶语伤人」（煮え酒は人の体を傷つけ、悪口は人の心を傷つける）C13「酒落欢肠千杯少，酒落愁肠烦恼多」（酒は喜ぶ腸に落ちると、千杯でも少なく、酒は憂いの腸に落ちると、悩み事が多い）

まず、両国の諺の意味を見てみよう。J6 は、飲酒は諸事の障りとなると述べている。働きもしないで、酒を飲み、朝遅くまで寝ていたのではたちまち貧乏なるのは必至のことである。J7 では、体に害毒となるあらゆる物の中で、酒はその最たるものである。すなわち、万病の元であると述べている。J8 では、酒は人の気を狂わせる飲み物であるといっている。J9 では、酒はすべての悪事の元であるといっている。J10 では、飲酒は諸事の障りとなることを語っている。J11 では、酔ったあげく、刃物を振り回すはめになるといっている。以上取り上げた日本の諺は、全て単句文で成り立っているので、表現の中に出ている酒が「気違い水」、「諸悪の基」、「諸道の邪魔」、「剣の舞」、「身の薬」などに喩えられている。J7～J10、J11 は全て酒の害を説く諺である。

酒が「気違い水」のように喩えられるのは、酒がもたらす悪い効果を人々に警告しているからである。「諸悪」は多種多様な悪いことを指す。酒が悪を働く根源となることを示唆している。「諸道」には世間での仕事や習い事などを総括している意味が含まれている。酒のせいで、人が酔ったら、剣などの刃物を振り回すような行動に出る危険性があることも諺の中から窺える。また、諺の中で、「気違い水」、「諸悪の基」、「諸道の邪魔」、「剣の舞」というような言葉を用い、酒を強く批判していると思われる。

しかし、酒は両面性があると言っても過言ではなかろう。酒はそれなりに人々に愛され、賛美される面もある。日本人には「酒に十の徳」（J12）があると思われている。日本人なりの考えがあるばかりでなく、中国から伝わってきた詩や名句なども日本人に吸収され、日本文化になったものもある。

J13、J14、J15～J18、J19～J22 は、中国に出典がある諺である。中国ではまだ名詩、名句として扱われているが、日本では諺という形に変わったのである。それぞれの意味を見てみよう。J14 では、酒を適度に飲むならば、どんな薬よりも体に一番よいといっている。酒を飲むと、血管が広がり、血液の循環がよくなり筋肉のこりをほぐし疲れを取ってくれるのである。また気分の転換をはかることができ、ストレスを解消してくれるし、食欲を増進し睡眠を促進する。快眠快食は長寿に通ずるものである。酒は人間の体と心に働く百薬の長である。J15 は孔子が自らの節度ある生活態度を述べた言葉である。酒はどのぐらい飲むか分量は決めずに飲むが、酔って自分自身を取り乱すようなことはない。節度を失うことのない酔い方を持って自分の飲酒の定量とするということである。J16 は、酒を好んではいけないと語っている。酒は気違い水であって、決してうまいものではない。中国、宋の范质が兄の子を戒めた詩の一節である。J13 の次に続けて「楽しみ極まって悲しみとなる」という文がある。礼儀的に節度正しく始まった酒宴も極点に達すると、酔狂のあげく酒席も乱れたものとなる。J17 では、酒を飲むと口数が多くなり、そのために失言も出ることをいっている。J18 では、飲酒は詩作の動機となり、また、色情のさそいだすものでもあると述べている。J19 の「箒」は、ほうきの意である。「玉」は酒を賛美する言葉である。酒は心配事や悩み事を払い去ってくれるすばらしい箒のようなものである。J18 と J20 は、北宋の詩人・文章家の蘇軾が（号東坡、1036～1101）酒の効用やすばらしさを賛美したものであり、「洞庭の春色」という詩に見られることばである。蘇軾は「酒はまさに詩を釣り上げる釣り針のようなものであり、また愁いやつらいことを忘れさせてくれ、清めてくれる、玉のように美しい箒のようである」と酒をたたえている。J18 は、酒を飲みつくすと水でも飲む。飽くことがない喩えである。蘇軾の詩は、酒がなければないで、その代わりとして水を飲んで満足している意である。J21 では、酒の入る腹は別にあるということである。また、酒を飲む量は体格の大小には関係ないことにも言う。J22 では、たった一杯の酒と思っても、続けばそのぜいたくがやがて国を滅ぼすことになる。また、賄賂や饗応が国を滅ぼ

すことの喩えである。J23 では、物は完全でないところにかえって味わいがあってよいと述べている。

一方、中国の諺では、C7 では、よい酒は病を治す薬であるといっている。また、C8 は酒を飲むことによって起こった体の不調は酒という薬で治すということから、問題を引き起こした人はその問題を解決すべきであるということの喩えである。C9 では、酒を飲むことによって、力も湧いてくることを述べている。C10 では、酒の悪効果をいっている。酒の効果については、貝原益軒の『養生訓』の中に「酒は少し飲めば陽気を補助し、血気をやわらげ、食気をめぐらし、愁いを取り去り、興をおこしてたいへん役に立つ。またたくさん飲むと酒ほど人を害するものはほかにない。ちょうど水や火が人を助けると同時に、また人に災いをするようなものである」という酒のプラスとマイナス効果を訓じている。さらに、王湘仁（2001：284）も「酒が酒であるのは、アルコールが人の精神を興奮させ、人の意識を朦朧とさせることができ、興奮剤と麻酔剤の効能を有するからであり、まことに不思議である。臆病物は酒を飲んで勇気を奮い起こし、気が滅入っている者は酒を飲んで憂さを晴らし、儀式の参加者は酒を飲んで儀式を行い、祝う者は酒を飲んで祝って喜ぶ。ただ、限度をしっかりわきまえることが大事で、飲みすぎれば、おそらく楽しみが極まって悲しみが生じ、憂いに憂いを重ね、願いと相反することになる」という酒がもたらす効果に対する人間の反応を述べている。そして、C11 では、冷たい酒を飲んではいけないと示唆している。飲むと、命を損ねることになるのである。逆に、C12 では、煮え酒も体を損ねるものであるから、それも飲んではいけないと戒めると同時に、対句形式で、悪口も人の心を傷つけるので、言ってはならないと暗示している。また、C13 では、酒は喜んだ時飲むと、千杯でも少ないのであるが、悲しい時飲むと、悩み事も増える一方であると述べている。

酒の両面性が語られる諺を見てみると、酒の善を説き、一方、酒の悪を説くまったく意味が反対している反義的諺も存在している。反義的な諺に関して、温端政（2005：140）は「それぞれ意味が対立している諺を反義的諺と名づけている。なぜ反義的諺が生まれるかというと、人間の生活体験は千差万別で、その結果、異なった認識、異なった結論が生まれるからであろうと思われる」とその定義と生まれる理由を述べている。

それで、酒そのものは善悪がなく、酒を扱う人間の行動によって、まったく違う効果が出ることを語る諺もある。酒の悪いところを語る諺は J7～J11、J17、J18、J22、C10、C13、C12 である。良いところを語る諺は、J13、J14、C7、C8 などがある。また、酒は善でもない、悪でもない、酒を扱う人間のやり方により、導く結果が異なるという諺は、J13、J17、C8、C13 などである。

なお、日本には出典が考証できる酒に関する諺がある。その出典に関しては、次の表のようにまとめられている。

表１　中国から伝わってきた諺の出典表

中国の名詩名句からの諺	出　典
「酒は百薬の長」	「夫盐食肴之将, 酒百药之长, 嘉会之好」〔漢書―食貨志・下〕
「酒は量りなし、乱に及ばず」	「肉虽多，不使胜食气。唯酒无量不及乱。」〔論語－郷党〕
「酒を嗜む無かれ、狂薬にして佳味に非ず」	「戒而勿嗜酒，狂药非佳味。能移谨厚性，化为凶险类。古今倾败者，历历皆可记」〔小学―嘉言〕
「酒極まって乱となる」	「酒極則乱、楽極則悲」〔史記－滑稽伝-淳于髡〕
「酒口に入る者は舌出ず」	「齐桓公置酒，〈略〉管仲曰，臣闻之, 酒入口者舌出, 舌出者弃身，与其弃身，不宁弃酒乎」〔韓詩外伝――〇〕
「酒は詩を釣る色を釣る」	「应呼钓诗钩，亦号扫愁帚」〔蘇軾―洞庭春色〕
「酒は憂いを払う玉箒」	「应呼钓诗钩，亦号扫愁帚」〔蘇軾―洞庭春色〕
「酒が尽くれば水を飲む」	宋代の詩人、蘇軾（東坡）の詩「有酒不辞醉，无酒斯饮泉」
「花は半開き酒はほろ酔い」	「花看半开，酒饮微醉, 此中大有佳趣」〔菜根谭-后集〕

以上挙げた諺が日本の諺として成り立っているのは、日本人に自分達の文化思想として認められている証拠である。中国の古典著作や詩からそのまま伝わってきた諺は、歴史的には古いが、しかし、諺の内容として、今日でも立派に通用することができると言える。それに、元々中国の文化であったが、日本に定着し、いまは日本人の知恵として運用されている。これらの文と句はいまでも中国の古典文学の中で、名詩名句として活用されていると同時に、日本文化に溶け込み、日本の名句になり、諺として現在まで保ち続けられている。滑川（1985：230）も「漢民族の文化ともいえる中国文化がわが国に伝来するにおよんで、仏教、文字、衣・食・住の技術が伝えられると、日本人はたくみに日本化して文化を創り出していった。都市を中心に新文化が広がっていく。諺の世界にも中国文化が影を投げかけている」と中国文化の日本への影響を述べている。

日中の諺では、共に酒を称えたり、酒を批判したりしているのである。その中で、酒の悪い方面を述べる諺の表現として、日本の諺では、酒を飲むと、人間は悪事を働く行動に出るという考えが反映されているが、中国の諺では、酒が体を壊す物であるという考えが反映されている。酒のよい所を表現する諺として、日本では、「酒に十の徳」で酒を飲むことによって、酒で体が癒されたり、人間同士の関係を一層親しくさせたりすることもできると考えられている。中国では、酒を飲むと、病気も治ったり、力も入ったりすることなどが述べられている。

4. 酒と人間性

（日）J24「酒が言わする悪口雑言」J25「酒は本心をあらわす」J26「酒は人を酔わしめず人自ら酔う」

（中）C14「一分醉酒，十分醉德」（一分は酒酔い、十分は徳酔い）C15「酒能乱人性」（酒は人間性をかき乱すことができる）C16「酒后无德」（酒を飲んだ後は道徳がない）C17「酒后吐真言」（酒を飲んだ後は本音を吐く）C18「酒不醉人人自醉」（酒は人を酔わせず、人は自ら酔う）

「酒と人間性」に関する日本の諺の意味を見ると、J24 では、酔って人を罵倒したりするのは、みな酒のせいであると述べられている。悪口雑言は人が酔ったあとよく言うということである。酒に酔った人が使う言い訳にもなると言える。J25 では、酒の酔いはふだん包み隠しているその人の本性をさらけ出してしまうことを意味する。人間は、普通本心を隠し、本音を言わないのであるが、酒を飲んだ後、つい本音を言ってしまう傾向があるといっている。また、酒の効力は人間性まで暴いてくれる。「酒を飲んで酔うのは酒の罪ではなく、飲み人自身の罪である」という。

他方、中国の諺では、C14 は、酒を少し飲んで酔ったのは酒酔いだと言って済ませるが、飲みすぎて自分をコントロールできなくなったら、道徳に反する悪事をすることを示している。いわゆる、少しぐらいの酔いは、酒に酔ったことだけだが、泥酔すると、本性を失うことになると言っている。酒飲みが度を越えたら、自分自身も自己管理ができなくなる。C15 の意味は、酒は人の本性を乱すことである。C16 では、酒を飲んで、酔ったら、普段の礼儀正しさを失い、道徳も守らなくなると述べている。また、「酒乱性（酒は人の性質を乱す）」とも言われる。どんなに礼儀正しい人でも、酒を飲み、酔っ払ったら、人間性を失う傾向がある。これは SC15 とほぼ同じ意味である。C17 では、酒を飲んだ後、人はぼんやりしている状態の中で、普段では心にしまっておく隠し事や気持ちを全部さらけ出すことがある。これは、J25 と大体同じ意味になる。

「酒と人間性」の分析の中では、両国共に、人が酒に酔った後に人の品性をさらけだすことが諺の中に反映されている。諺の中で、酒を飲むと、理性的な自分を失わないように気をつけなければならないと示唆している。J24 と C16 は、酒を飲んだあと、口から下品な言葉が出やすいと言っている。C16 のほうは、人間の品性・道徳と結びつけているので、酒に酔った人の行為を強く批判する程度は、J24 より厳しい。J25 では、酒は悪口雑言と人間の本心を引き出すことがあるということを語っている。C14～C17 は、酒を飲む度合いと酒を飲んだ後の人間の「徳、人間性」を強調している。そして、J26 と C18 はまったく意味が同じである。酒を飲んだあと、人間は酒の働きでふだん表に出ない自分の性格などがついつい出てしまう傾向がある。酔っ払いのスタイルも人さまざまであるが、このような酒の効能を利用しようとした、種々の酒宴を想起することができる。

諺に見る「酒と人間性」という関係では、日中の諺は形式が異なっているが、同じ内容が語られることが分かった。その内容として、酒は人間性を乱すことがあり、酒を厳しく批判していると同時に、酒を飲んだ後、本音を吐くことにもなると述べられている。所謂、酒は人間の悪い面と本心を導き出す可能性のあるものである。穴田（1982：104）も「人を知る酒が近道、酔って本性を表すと、パーソナリティの核的部分は酒を飲むことで表面に出るという考え方がある。逆に言えば、人間普段は役割行動や仮面をかぶっているものであると考えられる」というように、酒と人間との関係を述べている。

5. 酒と人間関係

（日）J27「酒買って尻切られる」J28「酒は先に友となり、後に敵となる」J29「親の意見と冷酒は後で効く」J30「食外れはするとも酒外れはせぬもの」

（中）C19「酒肉朋友，柴米夫妻，盒儿亲戚」（酒肉友達、柴米夫婦，箱親戚）C20「感情深，一口闷；感情浅，舔一舔」（感情が深いなら、一口飲め、感情が浅いなら、一口舐めろ）C21「喝酒喝厚了,耍钱耍薄了」（酒を飲み、厚くなり、金で遊び、薄くなる）C22「吃酒朋友千个有，落难朋友半个无」（酒を飲む友達は千人もいるが、難儀を共にした友達は半人もいない）C23「陈酒味醇，旧交情深」（長年の貯蔵酒は味が濃く、長年の旧交は情が深い）

「酒と人間関係」に関する諺の意味を見てみると、J27 は、相手に酒をおごってやったのに、相手からかえって尻を切られるような目にあわされるという意味である。好意を尽くしたのに、かえって損害を受けることの喩えである。「酒」は、「酒」そのものの意味がなくなり、相手に捧げた「よい事柄」としての喩えである。直接酒には関係がなく、酒を奢った相手から、被害を被ったことになる。人間関係の複雑さと背後にある不信感も窺える。J28 では、酒は友をつくるきっかけになるが、後でその友が敵となる原因にもなることを意味する。酒でつくった友は敵に転換する可能性があるといっている。人間関係の複雑さを J28 から窺うことができる。また、J29 と J30 は、親子関係と一般的な人間関係を述べ、その中で、J29 では、親の意見を冷酒に喩えているのは、両者とも後で効くという共通点に基づくからである。冷酒は飲む時、はじめは何も感じないが、しばらくして、酔いがまわるものである。親の意見も同じく、子供は最初に聞いたとき、なんとも思わないが、時間が経ち、窮地に陥った時、親に言われたことを思い出して、後悔することがあるということである。J30 では、付き合いをする上で、食事は断ることがあっても、酒の席は断ってはいけない、人付き合いを円滑にするためには、酒は欠かせないものであると暗示している。

一方、中国語の諺では、C19～C21、C23、C22 は友人関係、C5 は夫婦関係、友人関係、親戚関係を述べている。C20 は、感情が深ければ、一口で飲み干す、感情が薄ければ、舌先で嘗めることを意味する。酒宴で相手に酒を勧める時、よく聞かれる言葉である。二人の仲がいいことを示すために、一口で酒を飲まなくてはならない。酒を飲むと、友人との

相互の親近感、一体感を醸成し、互いに胸襟を開くことになる。酒は人間関係の潤滑油として働くものである。C19 では、「友達は酒を飲んだりして、つくられるものである。夫婦は柴と米があると、何とか毎日を過ごせる関係である。親戚同士の間で、お互いにプレゼントを贈ることは親戚関係を維持するための必要な手段だ」と述べている。「米」と「面」は中国でありふれたもので、日常生活の平凡さを象徴している。「酒」と「肉」は豪華な料理を象徴しており、これらの食事で結ばれた友人関係が長く続かないと批判している。世の中のいろいろな人間関係の中で酒と肉による友達関係は何か危うい関係であることを暗示している。一方、C21 では、「一緒に酒を飲む人は友情を深める。一緒にギャンブルする人はお互いに相手を傷つける」という意で、酒はあとの良好な関係を進めるものだと述べている。「厚」と「薄」が用いられ、前句と後句との間は比較関係にあり、その原因は、「酒」と「お金」である。しかし、C22 のように前句と後句が転折関係になっている。「酒を飲んだりして、つくった友達が多いが、困難に出会った時、誰も助けに来てくれない」と、酒肉の友のあやうさを表現している。前句の「千個」と後句の「一人」の対照は読み手に深い印象を与えるだろう。しかし、C23 では、酒は置かれれば置かれるほど味にコクがあるように、友人関係も長く付き合えば付き合うほど友情が深くなるのである。

「酒と人間関係」という節では、日本語の諺では、親子関係を含め、普通の人間関係でも酒の席を断らない方がいいと述べ、相手に酒をおごってあげたのに、相手から裏切られることから、人間関係の複雑さと不信感について述べている。人間関係をうまくするには、酒が欠かせないものである。中国語の諺では、酒の味から古い友人関係を賞賛し、酒でつながった人間関係をスムーズに運ぶことを語ると同時に、酒で結ばれる友達関係も長く続かないものであり、試練を耐えるものではないと述べている。

6. 酒と女色

（日）J31「酒飲む女は湯巻きはずしてでも飲む」J32「色好まぬ男は玉の杯底無きが如し」J33「酒中国に江戸女、住まい京都に武士薩摩」J34「酒は古酒、女は年増」J35「酒と女と博打には錠おろせ」J36「世の中は酒と女が敵なり」J37「陥り易きは酒の海、迷い易きは色の道」J38「酒淫の二つは命を鋸挽き」J39「とかく浮世は色と酒」

（中）C24「潞州的酒，女人的手」（潞州の酒、女の手）C25「酒不顾身，色不顾病，财不顾亲，气不顾命」（酒を飲み始めると、身に配慮しない。女色に耽ると、病に気をつけない。財があると、親族にかまわない。怒りが勃発すると、命にかまわない）C26「酒坏君子色坏人，烟伤五脏气伤心」（酒は君子を悪くし、色は人間を悪くし、煙草は五臓を損ね、怒りは心を損ねる）C27「避色如避难，冷暖随时换；少饮卯时酒，莫吃申时饭」（女色を避けるのは避難するようであり、寒さと暑さに従い、衣服を増減し、朝の酒を少なく飲み、午後三時から五時までの食事をしない）C28「酒色伤人，酒色误事」（酒と女色は人を傷つけ、酒

と女色は物事をしくじる）C29「喝酒不醉最为高，贪色不迷是英豪」（酒を飲むが、酔わないのは最高で、女色に耽るが、惑わされないのは英雄）

「酒と女色」に関する諺の意味を見てみると、J31 は酒を魅力に耐えられない女の姿が描かれている。J33 では、各地での優れたものを列挙した言葉である。酒は中国地方産のものがよく、女なら江戸の女、住居を持つなら京都に限るし、武士は薩摩の武士が一番侍らしくてよい。J32 は、杯は酒を持つ酒器であるが、すべてのことにすぐれていても、女色に興味のない男は情趣を解さず、立派な杯に底がないように人間として不完全であると述べている。風流のない男を底のない玉の杯に喩えている。また、J33 では、日本で酒の名産地は中国地方であり、美しい女がよく出る所は京都であると語っている。J34 では、酒も女も好きな男は、古酒と年を取る女を同じように扱われ、同じようにコクがあると感じているだろう。しかし、酒と女はよいところばかりあるのではなく、J35 と J36 では、酒、女との関係を適切にコントロールできず、悪い結末に至ることもあるという。J37 では、酒色の道には身を誤りやすいことをいう。J38 では、酒と色欲におぼれることは、命を少しずつ縮めるようなものであるということを述べている。J39 では、この世の快楽は酒と情事に尽きることであると述べている。

他方、中国語の諺で、C24 では、潞州（酒の産地）の酒を女の手に喩え、繊細な味であると称えている。酒はおいしいが、しかし、時々、人間に悪い影響を及ぼすこともある。例えば、C25、C26～C28 は、酒と女を批判し、体を壊したり、人格を壊したりする可能性もあるといっている。だから、C29 では、適当に飲んだり、女に惑わされなかったりすることは最高であると述べている。C26 と C27 では、中国人の養生の方法を語っている。「卯时」とは、朝の五時から七時までである。「申时」とは、午後の三時から五時までである。中国語の諺では、「女」だけを用いて酒を飲むことによって、女を責めている諺は見当たらないが、「色」を用い、婉曲的で女を批判する諺がたくさんある。諺における直接的か間接的に賛美、批判するところが異なる。

両国の諺ともに、「女」と「酒」について、戒めるべきところに言及されている。J35、J36 という諺に現れる「女」は普通の女を指しているのではなく、合法的な妻以外の女を指しているのである。J37、J39、J38 の「色」、「淫」と同じような意味合いを持っているのである。このように、日本語の諺には、両極端な話が持ち込まれている。一つは、酒と女で世の男の身を持ち崩すことが多く、酒と女を敵と見なし、さらに、博打も付け加え、この三つに手を出すなという考え方である。もう一つはこの世の快楽は、情事と酒に尽きており、世間を渡るには、個人の欲求としては金と酒と女が常に付きまとうという考え方である。このように、「酒」と「女」に対し、まったく正反対な考え方が諺の中に読み取れる。また、女色を好まない男は酒を盛ることができぬ底のない杯のように不完全であると批判する見方も諺の中から窺える。「男性が女色を好むことは極めて当たり前のことであり、むしろ女

色を好まない、もしくは女性の誘惑に応じないことを男こそ‘男の恥’であるという認識を示したものが見られる。つまり、日本の方には‘色遊び’を正当化している認識の上で、女色を好まぬ男性がむしろからかわれる立場に陥ってしまう大変面白い一面が窺える。」（金 2002：208）

一方、中国語の諺では、「女」という言葉が現れずに、全て「色」という言葉で「女色」を意味しているのである。酒と女を同一視される諺は両言語の諺にも存在してある。一方、中国語の諺では、同義対応の対句形式で、酒は君子を悪くし、女色は男を悪くするのである。後句は前句と対応しつつ、煙草も怒りも酒や女色と同じように、悪い役割しか果たさないので、それらのものに触れないようにすると暗示している。しかも、酒と女色は男を損ねるだけではなく、物事を怠らせることもあると戒めている。

日本でも、中国でも、酒と女が同質的な悪いものとして扱われる考えはやはり封建時代から残されてきたもので、女性に対する軽蔑が見られると同時に、女性の社会地位も低かったことが考えられる。また、日本語の諺では、酒は古酒がおいしいかのように、女も年増のほうは情愛が深いのであると示唆している。中国語の諺では、酒の味を女の手に喩え、きめ細かい味をしていると称えている。また、男はどんな度合いで女色と酒を扱うかということも気をつけなくてはならないと述べている。

7. 酒と健康養生

（日）J40「根深雑炊生姜酒」SJ41「酒三杯は身の薬」SJ42「良い酒はよい血をつくる」（中）C30「喝酒不要过量，用牛不要过度」（酒を過量に飲みすぎてはいけない、牛を過度に使いすぎてはいけない）C31「热酒伤肺，冷酒伤胃；冷热适度，少喝为贵」（熱い酒は肺を傷め、冷酒は胃を傷める。熱さと冷たさが適当で、少なく飲んだほうがいい）C32「冷酒伤命」（冷酒は命を損ねる）C33「美酒不过量，好菜不过食」（美酒は過量に飲まず、ご馳走は過量に食べぬ）C34「吃酒不吃菜，必定醉得快」（酒を飲む時、料理を食べないと、必ず早く酔う）C35「冷狗肉，热冬酒，不怕冷得难出手」（冷たい犬の肉、熱い冬酒なら、手が出せないほどの寒さも恐れない）C36「酒醉不入房」（酒に酔うと、部屋の中に入らない）C37「酒喝多了伤心肺，盐吃多了伤脾胃」（酒を飲みすぎると、心肺を損ね、塩を食べ過ぎると、脾臓と胃を損ねる）C38「十分酒量吃了七八分，健脾活血养精神」（十分の大酒飲みは七八分を飲んだら、脾臓を健康にし、血行を盛んにし、元気が出る）

「酒と健康養生」に関する諺について、まず、日本語の諺の意味を見てみよう。J40 の根深雑炊は、ネギをたっぷりいれた味噌仕立ての雑炊であり、生姜酒は、生姜を入れた酒、あるいは、すった生姜に味噌を入れて炒ったものに酒を加え、一、二回煮立たせて飲むものをいう。根深雑炊生姜酒は冷え込みから体を守る効能があるという言われがある。実際、酒も生姜も体を暖める効能を持っているので、酒に生姜を加えると、その薬効用がさらに

増すようになる。J41 では、酒を三杯飲むと、体によいといっている。当然、三杯は実際の三杯ではない、象徴的に適量ということを表わしている。また、酒を飲むと、血行も早くなるので、血液循環にもよいと言われている（J42）。

一方、中国語の諺では、過量に酒を飲んではいけないと戒めている（C30）。熱い酒にせよ、冷たい酒にせよ、肺と胃を損ねるので、熱くもなく、冷たくもない酒、また、量も多くもない酒のほうが体よいのである（C31）。冷酒のほうはさらに体を悪くすると述べている（C32）。美酒でも、ご馳走でも、適量に食べたり、飲んだりすることが大切であるといっている（C33）。生活の習慣として、酒だけを飲まず、時々、料理と一緒に食べた方が酔うことも速くなることはないと語っている（C34）。C35 では、寒い冬には、犬肉と暖かい酒は体を暖めるよい方法であると述べている。また、C36 では、健康養生の一つの注意点として、酒を飲んだら、すぐに性行為を行わないほうがいいと戒めている。そして、C37 と C38 では、酒を多く飲むと、心肺を傷めたりするので、適当に飲むと、脾臓も血行もよくし、元気にもなれると述べている。

両国の諺とも言及するのは、酒が血を良くする効用を持っていること、適量に飲むと、体によい影響を与えることである。日本語の諺では、生姜酒が寒気を防ぎ、体を暖める役割を果たし、また、酒の適量と酒の品質の良さは体によい影響を与えることを述べている。一方、中国語の諺では、酒の適量だけではなく、酒を飲みすぎたり、酒を飲む生活習慣を間違ったりすると、体に悪い影響を及ぼすと述べている。

8. 考察結果

共通の話題を扱う諺に、「酒の飲み方」、「酒の両面性」、「酒と人間性」、「酒と人間関係」、「酒と女色」、「酒と健康養生」という面から分析を行ってみたが、「酒の飲み方」では、少なく飲むと体によいことになるが、多く飲むと体に悪い影響をもたらすと語られている。「酒の両面性」では、日中の諺とも酒の良し悪しが述べられている。「酒と人間性」では、日中とも、人間の悪いところを暴露すると言及している。また、日本語の諺では、酒を飲むと、人間の表においては、悪口雑言を口に出すが、裏では、普段見えない人間性の姿が見られるといっている。最後に「酒と人間関係」では、日本語の諺では、裏切られる人間の様子と複雑な人間関係が語られている。中国語の諺では、酒が人間関係をスムーズにするための欠かせないものであると述べられている。それぞれ民衆は酒に映している人間関係への考え方が窺える。「酒と女色」では、両言語の諺ともに、女を軽蔑し、女色を戒めるべきであると述べる一方、女の社会地位が低かったことを反映している。「酒と健康養生」では、酒を適量に飲むと、体によいが、飲みすぎると、体に悪い影響をもたらすと述べている。

以上、日本語と中国語の酒に関する諺の対照考察を試みた。酒に関する諺には、酒の風俗習慣が反映されている。酒の風俗習慣では、民族の心理と性格特徴などを表わしている。諺から、日中両国の民衆の酒に対する考えがどうなっているかを窺うことができる。

表 2　共通の話題を扱う諺に見られる両国民衆の考え方の対照表

	諺に見られる日本人の考え方	諺に見られる中国人の考え方
酒の飲み方	酒を飲む時、少量は益であり、過量は損である。	
酒の両面性	酒の両面性とも言及している。	
	様々な比喩表現が用いられ、酒の良い効果と悪効果が語られる。 中国に出典のある諺が多い。	酒は病を取り除く薬である。 直接酒の良し悪しが述べられている。
酒と人間性	酒を飲って酔うと、その人の人間性の悪いところを暴露する。	
	口に出す言葉も汚くなる。さらに、本心を表わす言葉も口に出す。	本音を吐くことがある。
酒と人間関係	酒で結ばれた人間関係の複雑さと不信感が窺える。	酒は人間関係の潤滑油になる。
酒と女色	女色と酒が同一視され、女色を批判し、女を軽蔑する気持ちが窺える。	
	女色を知らない男は不完全である。 美人の故郷京都と美酒の故郷中国地方と並列する。 古酒と年増の女の共通点を語っている。	酒と女色は命を損ねたりするものであると戒める。 酒の味と女の手が同じくきめ細かいである。 酒は適量、女色が好きであるが、夢中にしないほうがよいと述べている。
酒と健康養生	酒は血を良くするので、適量に飲むと、体によい影響を与える。	
	生姜酒が寒気を防ぎ、体を暖める。 また、酒の適量と酒の品質の良さは体によい影響を与える。	酒を飲みすぎたり、酒を飲む生活習慣を間違ったりすると、体に悪い影響を及ぼす。

参考文献

穴田義孝（1982）『ことわざの心理学』人間の科学社

温　端政　主编（2004）『中国谚语大全』上海辞书出版社

温　端政（2005）『俗语研究与探索』上海辞书出版社

王　湘仁（2001）『中国飲食文化』鈴木博　訳　青土社

金子武雄（1983）『日本のことわざ』（全 4 巻）、（一）評釈、（二）続評釈、（三）評論（1983）、
（四）概説・講説（1983）　海燕書房

金　秀眞（2002）「日韓両言語における諺に現れる男女の世界－男女の二元対立の諸相を中心に－」広島大学博士論文 第 2770 号

鈴木棠三（1962）『ことわざ処世術』東京堂

尚学図書編集（1981）『故事・俗信諺大辞典』小学館

滑川道夫（1985）『ことわざ読本』角川書店